

カンボジア統計局訪問記 その5

～ カンボジア政府統計能力向上プロジェクト・フェーズ2 ～

独立行政法人統計センター

野 崎 政 志

はじめに

筆者は、総務省統計局が中心となって支援する政府開発援助（ODA）の一環である「カンボジア政府統計能力向上プロジェクト・フェーズ2」の第1回短期派遣の集計/プログラミング専門家として、2007年5月17日から6月8日まで、カンボジア王国計画省統計局（以下「NISという。」）を訪問する機会を得たので、以下にその時の様子を紹介する。

今回の派遣は、これが11回目のカンボジア派遣となる総務省統計研修所職員のチーフ・アドバイザーに同行したものであったが、筆者にとっては初めての海外出張であるのみならず、プライベートでも海外旅行をしたことがなかったので、全く初めての海外であった。また、国内の出張もしたことがなかったので、まさに初物尽くしの出張であった。このため、筆者は訪問する前から、「これまで国内の業務で培ってきた集計技術・知識をカンボジアで役に立てることができるのか」、「NISの職員と英語でうまくコミュニケーションを取ることができるのか」など、少なからず不安を抱いていた。しかし、今振り返ってみると、不安だらけの派遣だったと言うよりも、今後の自分に大いにプラスとなる派遣になったと言えるだろう。

1. プロジェクト・フェーズ2の概要

まず、本プロジェクトのフェーズ2の概要を紹介すると、実施期間は、2007年4月23日から2010年9月30日までの約3年半の予定であり、主な目的は、カンボジア2008年人口センサス（国勢調査）を支援することである。

このプロジェクトは、(独)国際協力機構(JICA)によるNISに対する技術協力であるが、総務省統計局を中心に、総務省統計研修所、(独)統計センター、(財)日本統計協会、(財)統計情報研究開発センター及びICONS国際協力(株)が調査の準備、実施、集計等に対し、双方の特徴を生かし密接に連携し支援する官民合同型のプロジェクトである。

この技術協力に加えて、我が国の全面的な資金援助により、カンボジア計画省構内に新たに6階建ての統計センター（仮称）を建設中である。さらに、2008年人口センサスに対しては、国連人口活動基金(UNFPA)及びドイツ政府と連携して協力しており、我が国はその調査実施のための資金の約半分を援助している。



写真1 我が国の全面的な資金援助により建設中の統計センター（仮称）

なお、フェーズ2に先立って実施されたフェーズ1は、統計研修支援を中心に2005年8月28日から2007年3月18日まで実施された。その概要については、本誌2006年12月号に掲載されている。また、以下の総務省統計局のホームページにも掲載されているので、是非とも参照していただきたい。

<http://www.stat.go.jp/info/meetings/cambodia/phase2.htm>

2. 2008年人口センサスの概要

次に、本プロジェクトの主な目的が、「カンボジアの人口センサス及び関連する統計調査の実施能力の向上」となっているため、2008年人口センサスの概要について紹介する。

（1）調査について

今回の人口センサスは、2008年3月3日に実施される予定である。前回は、1998年3月3日に実施されたので、10年ぶり、1991年内戦終結後2回目となる。

調査は、調査員が各世帯を訪問してインタビューする方法（他計方式）で行われる。

調査系統は、NIS 州(Province)計画局 郡(District)計画事務所 地区(Commune)事務所 指導員 調査員となっており、この系統を通じて調査票が送付・回収される。

調査票は、調査票AとBの2種類がある。調査票Aは1枚紙（A3判）の世帯名簿で、12の調査事項が含まれており、1ページ10世帯まで記入可能となっている。一方、調査票Bは6ページ（A3判）からなる世帯票で、80の調査事項が含まれており、1つの世帯票で10名まで記入可能となっている。我が国の2000年国勢調査（大規模調査）が22の調査事項であることを考えると、かなり複雑な調査であることが分かり、実地調査が容易でないことが想定される。

80 の調査事項の中には、「調理用の主な燃料」（回答選択肢が、薪、炭、灯油、LPG ガス、電気など）や「飲料水の主な供給源」（回答選択肢が、水道水、井戸水、雨水、川や池の水など）など、開発途上国特有の生活のインフラに関する調査事項も見られる。

実際の調査票案は、前述の総務省統計局のホームページに掲載されている。

（２）集計について

Priority Tables と呼ばれる基本的な結果表は、米国センサス局が開発した人口センサス集計用ソフトウェア CSPro を利用して集計することになっている。この CSPro を用いると、調査票の入力から基本的な結果表の出力まで、一貫して集計を行うことができる。

結果の公表は、2008 年 7 月に世帯名簿を使用しての速報値、2009 年 7 月に世帯票を使用しての確報値が予定されている。また、結果の提供は、報告書のほか、CD や WEB 等を通じて提供される予定である。

今回は、この Priority Tables に加え、国レベルにとどまらない地域(地方)レベルでの統計データの利用を視野に入れ、新たに「従業地・通学地集計」や「小地域集計」等を予定している。これらの新しい集計については、NIS の情報処理担当職員のプログラミング技術を向上させるために、Excel VBA を利用して集計用プログラムを開発することになっている。

筆者の今回の派遣における主な業務は、この Excel VBA を利用したプログラミングの技術指導であった。

3 . カンボジアにおける主な業務内容

今回の派遣における筆者の主な業務内容を、感想を交えながら以下に紹介する。

（１）Excel VBA による簡易集計の指導

NIS の情報処理担当職員のほとんどがプログラミングの経験が少ないので、今回の派遣では、プログラミング技術の基礎に重点を置いて、約 20 名を対象に 4 回にわたって技術指導を行った。

いざ指導を始めてみると、受講者の熱心さに驚いた。「このコードを使用して、こういうことはできないか?」、「どうしてこのようにコーディングする必要があるのか?」などと、筆者の予想に反して多数の質問を受けた。

技術指導の終了後、受講者から回収したアンケートをみると、「非常に有意義だった」、「もっと長期間指導してほしい」という回答があり、「やって良かった」という満足感が溢れてきた。これが国際協力の醍醐味なのであろうか。

今回の技術指導の内容は、プログラミング技術の基礎ではあるものの、人口センサスの集計や結果審査を視野に入れながら指導したつもりである。NIS 職員の受講態度をみる限り、彼らは、将来的には独自にプログラム開発ができるようになると確信した。



写真2 N I S職員に対するプログラミングの技術指導の様子

(2) 調査区設定の技術指導の補助

N I Sでは、来年3月の人口センサス実施に向けて、準備作業が着々と進められていた。カンボジア全土が対象となる調査区設定は、重要な準備作業の1つであるが、昨年7月に開始され、本年8月の完了を目指している。本年3月末までには、全24州のうち19州を完了していた。

筆者は、本プロジェクトの人口センサスの調査区設定の指導を担当している民間側専門家に同行して、その技術指導を補助するために、調査区設定作業中のカンダール州のあるVillage(村)に赴いた。同州は、プノンペン特別市を取り囲むように位置している州である。

その村は、首都プノンペンとは違って、木造の家々が建ち並んでおり、子供たちが笑顔で走り回っている長閑な農村であった。

調査区設定作業の概要は、以下のとおりである。まず、村長宅を訪問し、複写した前回(1998年)のVillage Map及びEA Mapを見ながら、今回の調査区の境界線をどこにすべきかを相談し、これら2つの地図上に仮の境界線を記入する。

なお、Village Mapは、我が国の調査区地図に相当し、Villageごとの概略図(手書き)で、Village内の各調査区の境界線や主要なランドマークが記入されている。また、EA Mapは、我が国の調査区要図に相当し、調査区ごとの概略図(手書き)で、調査区の境界線や各世帯や主要な事業所等が記入されている。

次に、仮の境界線を基に实地踏査を行う。しかし、その境界線は、必ずしも道路のように明瞭な目印に基づいているわけではないので、要所々々で、境界線が不変的で明瞭なものかなど、妥当性を確認することになる。

その村の人々は大変親切で、丁寧に応じてくれたので、实地踏査を円滑に進めることができた。このように協力的なカンボジアの国民性には大変感心した。

实地踏査の後、最後は、調査区の境界線を確定し、新しいVillage Map及びEA Mapを作成するとともに、Census Frameに登録する。

なお、Census Frame は、我が国の調査区マスターに相当し、EA（調査区）ごとのデータベースであり、Village 名、Village コード、EA コード、調査区内の世帯数、調査区設定が終了したか否か、などの情報が含まれている。これは、人口センサス業務の進行管理や監督数リストとしての役割を果たすとともに、後日、Sampling Frame（標本基礎）としても利用される予定である。

ただし、筆者の滞在中は、我が国の市区町村マスターに相当する Village ごとのデータの入力が完了している段階で、EA ごとのデータは整備中であった。



写真3 調査区設定のための実地踏査の様子

（3）国家人口センサス委員会への出席

6月5日に、第3回国家人口センサス委員会(National Census Committee: NCC)が開催され、チーフ・アドバイザーや民間側専門家とともに出席した。このNCCは、副首相が主宰し、計画大臣のほか、各省庁の次官及びNIS局長がメンバーとなっており、人口センサスに関する重要事項を決定する権限を有している。この席上で、計画大臣から副首相に対して、人口センサスの準備状況が報告され、その後、副首相から人口センサスを支援するUNFPA、ドイツ政府、日本政府及びJICAに対して、謝辞が述べられた。このNCCの様子は、当日午後7時の現地テレビのニュースで放映された。



写真4 第3回国家人口センサス委員会（NCC）の様子

このNCCに先んじて、6月1日に第6回人口センサス技術委員会(Census Technical Committee: CTC)が開催され、チーフ・アドバイザーや民間側専門家とともに出席した。このCTCは、計画大臣が主宰し、NIS局長・幹部のほか、UNFPA やJICAを始めとした各ドナーの代表がメンバーとなっており、NCCへ報告する前段として、人口センサスに関する実務レベルの協議を行うことになっている。また、実質的なドナー会議の側面も持っている。この席上で、NIS幹部から計画大臣に対して、NCCへの報告の基となる人口センサスの詳細な準備状況が報告された。

ちなみに、前回(1998年)の人口センサスの時には、CTCは3回しか開催されなかった。今回は、すでに6回も開催されていることをみると、前回と比べて、より密接な情報交換やすり合わせが関係者の間で行われていることがうかがえる。

なお、NCC及びCTCの議事録等は、前述の総務省統計局のホームページに掲載されている。

おわりに

筆者は、今回の派遣において、様々な交流の場や新しい経験を通じて多くのことを学んだ。また、統計そのものについても改めて考えさせられた。

今回の短期派遣をもって、フェーズ2が開始され、これに伴い2008年人口センサスに向けて準備作業も本格化し、重要な作業が続くことになる。現在のカンボジアと日本の国レベルでの友好関係に加えて、本プロジェクトにおける個人レベルでの友好関係をみる限り、カンボジアの2008年人口センサスは必ず成功するであろう。